土屋正義編輯

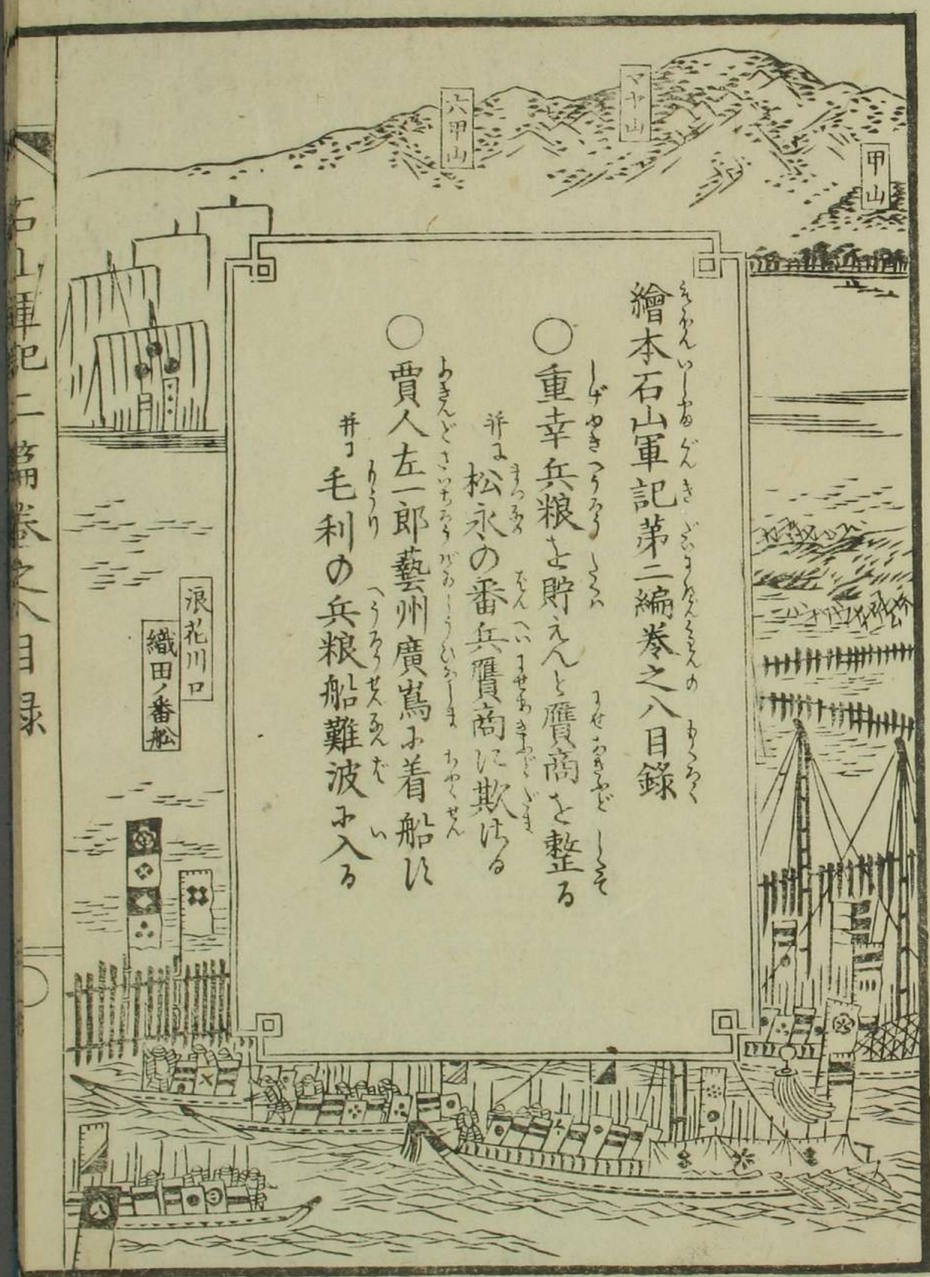
繪本石山軍記

第二編

八

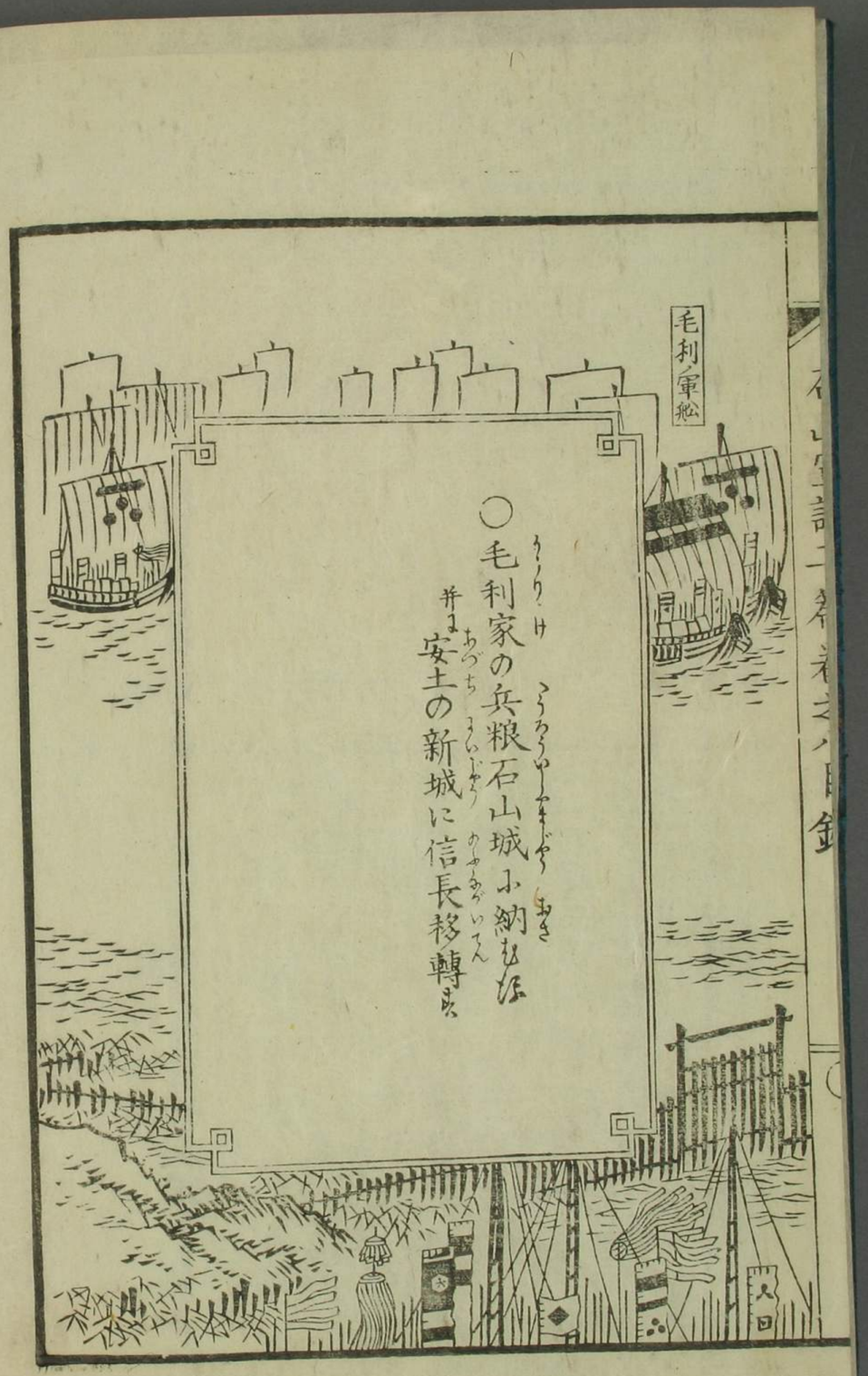
へ遠14
2269
18

特 へ 14
2269
18



繪本石山軍記第二編巻之八目録

○重幸兵粮を貯えんと賈商を整る
并ニ松永の番兵賈商に欺はる
○賈人左一郎藝州廣嶋ゟ着船し
并ニ毛利の兵粮船難波ゟ入る



○毛利家の兵粮石山城ゟ納ル法
并ニ安土の新城に信長移轉ス

繪本石山軍記第二編卷之八

土屋正義　編輯

○重幸兵粮を貯へと賤商を整る并びに松永の番兵賤商に欺さる

然程に織田方の附城と固め諸將戰ふ度毎ゟ敗軍まれば世の風説も
鬱悒思ひ生中無謀の合戰せんより銘々篭ゟ特城相守りて石山ゟ兵粮
の盡るを候て宜圖を視積り乘込んとて砦々ハ談ひ合せ從是ーて後は
石山方にも屢合戰を挑懸れども唯堅く防ぎ徹へて戰ひ接へぢ專ら中
国西國南紀等の運粮通路通船を停んと介手當而已に力を竭しぬ石
山篭兵総勢六萬余人の門徒們日々夜々に喰立るものゝ充滿せー庫
裡の有米も漸に減立許りゆれば兵卒飢渴させて協ふべゝぢ軍師重

幸上人の御前に出詞静に言上しける様は既に城中粮米乏くなり斯て籠兵の氣配に抱り勇氣を落しむ大事に候へば片時も准備なくて有べからず故ふ某暗に愚考を巡し候ふに中國の毛利右馬頭輝元は別て先代より當寺に因て厚く殊更數箇國を領握し福有充溢の侯伯なり是へ密使を遣し給ひ上人御直筆の御書を以て兵粮米借用の儀を御依頼遊ばされ候ひあば輝元もや違背ふ稟されまじ其謂は信長豫て毛利三家を伏従せしめん心有共當城西海の咽喉に在て徒剛く支えて落着せず信長仆後を絶れん緯を恐れ未だ敢て中國へ兵を入ず倘當城陥没時は殆毛利家の難に至ん兩家の利害此中に有當寺は防禦は毛利の為とも早く御書を差遣されて然るべくんと稟し上れば顕如上人寂聞し名て何様軍師の賢慮の如く予依頼の條義諾はべん然りと雖も信長豫て數多の附城を構へ諸國の往来を止めん為假令毛利より兵粮送る共爭で易く城え納めしむんや却て敵の為兵粮を奪れ愈城中困勞ふさん軍師是等の計策ありや重幸謹んで答へて曰く仰せの如く無事に取納る緯甚だ以て難く候へども糧米外に索むべき方々毛利家さへ異議なく承引し兵粮贈り越るに於ては方便を巡し緯糠ど合せ城中へ取納るに易らるべく就夫ても上人の御書を捧げ這密使を委ねる人を殊に大切の勤役ふ候へ武士も悪く農民も宜しくを繁花の土地に物馴る賈人の門徒城内にあるべく其者を以て使とせんと云時に一色五郎左門常廣進み出で某が幕下の

從卒の中に泉州堺の津の賈人有名を出出の左一郎と稟せり読者年来商業の為に四國九州中國へ往来し諸國の案内も能存知人情も能通ず候ふ上頗る達辨の漢子に候ふと云重幸大ひに勸び疾く其漢子名出し給ひね密事稟し給めんと有れば五郎左卫門畏り座を立て已が部舎へと帰りるが聽て左一郎を伴侶て參りる重幸彼の賈人を見て稟しけるは汝御門主の御書を預る生前の面目一山に抱る大役を能勤めて思課せる奈何左一郎頭を地に付暫々の御方々在せる中より我們如き賈人を撰ミに預り大切の御使ひ命せ付らる條過分の僥倖一期の譽骨と挫ぐ躬を刻まるも御用仕遂でやい候ふべき重幸の曰く隨分手滑ふく御用果さば戰場の武功に勝る忠勤ぞ〳〵偖先中國へ赴くには自是泉州堺の津に到り彼地ふて信心の門徒を談合商船を一艘仕立て堺の浦より出帆まで〳〵織田家の番船浦々を堅むるも堺の津の賈人と者バ外國までも通商ふ故海上の往来自由ふん最も茲より堺へ到るには住吉に惟任光秀砦を構へ街道より通行し難し依て當城の東猫間川に添て猪飼野より田嶋村を過野通ひ畦路を索めて山在家刈田ふ出ふべ堺の北口へ幾程ふく此道筋には敵の砦てなし唯平野の西今在家の邊に松永彈正が幕下の隊將村井若狭と云る者屯集して往来穿鑿のよし能欺謀て脱通るべし且心得べきは諸國一紗に西々雌寇の疑情無的ふく何方も國界に新關を居へ僧俗論ぜず細吟ふ〳〵豫て此用慎心ふ緩まべ〳〵往来亦は關所役所ふての

応答毛利家に到て口演希望の代舌綽審に稟し含め上人御直筆の御書を始め次に毛利より兵粮運送の砌り河分木津難彼等の敵方の砦と討崩すべき謀畧密牒重辛より別紙に書認め吉川小早川両将宛名〻〻二通の密書を竹枝の中に隠し入令一個仙吉と呼貫人と假に主とし左一郎に伴侶させ主従旅懸の絹貫人に省し小烏石山を出て教〻の道條平野近くぞ急ぎゆきより茲に攝河平野若江の両道を堅め附る松永久秀ハ家臣村井若狭に兵五百人を附属し今在家の邊に陣取守る処主人松永彈正久秀ハ織田信長卿を恨る綽有て上表ハ隨心の容作るゝ雖も私ハ久逆の企を設けて了事ハ時節来ると侯ハゞ家臣村井若狭も主に故ひ警固の整備も表て許り半ば遊樂保養の心地に慰ミ半分に往来を咎め番兵們ハ相手欲氣に人待顔して居る処へ仙吉左一郎の両個ハ松永の陣所を豫て聽ハ役所の前を目禮ゆして両個行過んとゆけるを番兵聲を懸て呼止め

や侯両個何國の者ぞ行向ハ何方ぞ有体稟せと云れて仙吉小腰を屈め僕們ハ洛二條高倉絹貫人京産の絹を奈良に持行布乍綿併と交易し或ハ堺兵庫に駈廻り之を賣捌きを渡世の者更に胡乱の者にてハ候ハぞ御通し下されハ辱ゆと誠しやかに答へ云ハ番兵們一應ゆてハ聽入ぞ先行荷披きて檢査受〻と左一郎が擔へる櫃ども打覆して蛍拿眼して吟味者れ共色數の絹類糸類紐るハ或ひハ帯地袋物の類にて更ゆ怪しき品もゆく交易の帳面よむゆ去年より賣買代

賣商人
仙吉
松永が
番兵を
欺く圖

仙吉

物直段のメ高入銀皆濟不足商用一通りの帳面あれば何様仔細あ
き絹商人胡乱あーと評議〜名に一個の番兵尚狐疑〜て曰く石山地
城中ゐ農民及び門徒の町人們多く籠城せり汝等賈人に紛も無れ
ども石山の間者あんも知べうず汝們實に和州〜通ふ賈人ゐらば京地
出處の宿老より確證とも往來券書處持〜〜るべ〜持參せぞんば
通すべうぞと云れて仙吉頭と搔僕們年中他行稼ぎの商人ゆ〜出ゐ
毎に宿老相頼ミて往來券書を乞も氣の毒唯今之に處持仕らぞ
候ふと云彼番兵の者苦笑ひつゝ平日い右も左も斯る穿鑿の時節往
來券書を処持せぎるハ汝們業体柄に似ぬ手滑りゝ此時点一個の番兵
稟〜けゐ汝們京地〜扯返さぜて往來券書を把來れ但い行向に

定宿所あん宿の亭主ゐ實印持せ同道ゐて罷り來り定客相違ゐ
き證書を入ゐば異ゐく關所を通〜得させん最も主人ハ當陣に止置下
男を出ぞて計いせよと云仙吉左一郎ハ心ゐ歡び仙吉故意困ぢる面色
して偖々恐れ奉る御疑ひ石山間者とハ存ぢも寄ぞ併御役目の程
も恐惶れれば此上行向定宿の亭主を憑ミ印鑑持せて同伴致〜如何
様の証書にても入奉んと云番兵們竜ゐ介頼ミを許せば仙吉ハ左一郎
に打對ひて汝着る條不審を被る俺們自今河州譽田の定宿ゐる万屋
八衛門方〜趣きて御不審の為体を話說万乞万屋亭主に實印持
參〜汝同道にて御陣〜參られ證証請負文を入給ハり主從の押留解
〜め結ぶば速に御陣の關戸出さゐ処〜と急いで引連立返るべ〜片時

急げと追立れば斯る縡共陣所に有らんと軍師重幸よりも心得
さとられじ下僕と略し井出左一郎時こそ得うと心ふ勇み仙吉と荷
物を後に殘し何より大事の竹枝ハ一歩を千歩の手力雄と岩手戍
開く標示の善とも悪とも仕課を迄敵地の堺を追手風や關の扉
を開くや否や韋駄天の如く蒐出して平野の郷に脚ハ入ども自是堺
街道へ踵を轉じ刈田大豆家と打過て難なく堺の知己の方へ遁れ来り
ぬ徒て信心の門徒十余個を談合ひ商船一艘を整備立三百金餘り
の反物積入其翌晩堺浦と出帆して中國を差て下りにより偖亦後
ゟ残りし賈人仙吉ハ程よく左一郎の道を通し今ハ俺躬も工夫戍巡し
甘味此処と遁れ去んと番兵の油斷を窺ひ物を與へて探らばやと

て商ひ物の絹紬紐類把出し是ハ昨年售殘りの代呂物少し手數の
入し寢息物を厭ひふくべ逞上せんと番兵們へ配り與へ思ひ懸ぬき
賈人ゞ進物に威儀も威勢も打忘れ羅ふに飽ぬ人情にて闇鬼も呉る
に地藏顔是ハ偖心の利する賈人ゟ俺們箇條に終日居り詰て往来
省詰て張番まれ疫ハ京へ上ると雖も絹物土産に持も歸らず膝節脱
る袴衣類ハ見倒し屋の手に降参して季の流浪ハ襤褸ばつゝに沈
落し無慙や針にも継にも協ひ難い褓鼻吹に陷る迄倹約しても整へ
き此新衣と惜氣もなく恵まるゝ何しゝ拍子の瓢單酒ふ饗應る
るまり有難けれど資本の入ぬ追従口に膏流して喰り立れば仙吉仕濟し
ると心に打笑今般和州にて毛綿併奈良晒布類を相仕込ば賈捌きの

口も多く候ふて過分の利益も着〻候〻ば先祝ひ〻して献上仕る〻と云
ば番兵們大きに歡び更に守る用心の体もあく打寛ぎて僉集聞〻
つ銘々思ひくの雑話に逮び早火燈刻も打過つ仙吉も快よく夕
飯を喰せ何方も機嫌よげふ敢動居い仙吉い腹十分に夕飯を整め須
臾して便所に行体に応答〻役所の勝手の切戸と押開厠の側ある籬
を潛り脱後をも着ぜして趨出しふ難あく石山城中〻逃歸り軍師重幸
の前に出で果して松永の番兵に押留らる縡の一伍一什を話説井出左
一郎を堺の方〻首尾能脱去ませ〻次第具に禀〻出ぬれば重幸大き
に働きを賞ド了事毛利家の一左右待居すり恁て松永の陣所に
於い頓に番兵們い心も着を素より荷嚢帳面等も惜まぞ其儘棄おき

〻れば逃去〻と夢にも知ぞ夜い三更も四更も過竟にい東の天明らく
鶏の啼音の聞ゆもども賈人再び帰り来らば偖い這賈人主従〻癖者
〻把逃せ〻社残念〻と心着ども時刻〻過面々進物絹に心暗きれ是
等と上役の耳〻聽〻ふば俺們番兵の越度とあれば這儘夙説あ〻に爲
に如ぞ且残せ〻絹布類分把い是亦与る処の殘り福自然と授る戎
切そく番兵們い顰き歡び慾に傾く衆議一決〻賈人の行去も探索
ぞ隊將村井若狭〻も告ざりる是佛智不思議の然〻むは処重幸の
妙計圖に的れると松永ゞ野心と懐く懈怠と自然に暗合〻て木頻
寺の至要の密使と脱〻む処偏に如來の冥助あるん
○賈人左一郎藝州廣嶋に着船并ひ毛利の兵粮船難波ふ入る

然程に石山密使左一郎ハ堺浦より商船を仕立て中國へ下りゐが先淡州岩屋と舞子の間に船關を構へて通船を更む左一郎通船に綽馴しゐる上年來上下する堺の者ゆへ別條なしとて仆儘通せり次に播州姫路沖にて船中の行櫃吟味を受しゐ彼竹杖迄改目を留者ゆく船中の障碍程よく脱遁安藝國佐東郡厳島に着船

難波より藝州厳島へ陸路行程乃七十五里海上凡八十四里

聽て當城大守毛利家に到り摂州石山より密使の旨を奏者に附て稟し入れゐ毛利の家臣們之を聽届け則ちその使を客殿へ招くに唯一個の賈人体の者ゆえ謹んで上人の口演を弁舌船中人吟味の艱難ゆゑ話説宜く御執達仰ぎ奉るゑ竹杖割て上人の御書を呈しけれゐ奏者立て石山密使の次第を太守の御前に披露ゐしけり毛利右馬頭輝元披見あり直ちに吉川駿河守元春小早川左衛門佐隆景の兩大將を招き相議有る時に吉川元春の稟さゑ様ハ織田信長近年頻に蔓り權大納言兼右近衛大將に重任し征夷將軍の威を震ひ猥りに諸國を押領せんとす多年石山を攻潰さんの心ハ那首に要害の城廓築んと謀る是全く當家を襲ひ討んと内企の信長の心積りハ鏡に懸て看るゞ如し最も彼地ハ五畿七道の咽喉へ倘彼城陷る綽ゆ有ゞ信長直ちに兵を發して當國へ差向ん綽必然へ是故人の所謂唇觴る則ハ齒寒しとハ此譬諭へ且當今正親町院御即位大禮執行れし献金も當家より調進し奉りて天下ゆ美目を施しるも頭如上人の推舉に拠り旁以て

令般兵粮の依頼望に應じ貸與さんこと當家長久の計策あるべし元春の發語に小早川も實石山に當家の前楯の如し信長今迄是へ進發せざるは大きに本願寺が目上の瘤と故に兵粮処望に任さば弥篭兵鋭氣を固め尚も織田勢を受脳すべく且正邪を以て軍を論ぜば信長の攻る処は横逆之石山の防戰は唯退轉を嘆き信心一致を以て敵對処之枝助くは廣大無邊の善根永く當家の祈禱ともなんと云後見の兩大將兼引有れば然は衆議にも逮ぶまじとて則石山よりの望ふ応じ粮米五十万石貸送るべき旨使者を召て仰せ渡されれば井出の左一郎謹んで恩を謝し懐中より重幸の書状を拿出し粮米恩借賜る上は石山軍師鈴木源左エ門尉重幸御當家と申し糀せ仕り度次第容書御披見給るべしと執次を以て差出せば小早川隆景拿て押披き讀畢て大きに感じ信長石山城を攻寄て數度の敗軍に逮ぶと聽しも斯る智謀の軍師篭れば百戰百勝利軍を得る筈是正に宗法佛助の信者ゆえ早々兵粮運送せしゆえ尓方同船に帰國せしてく取敢ず令命を下して火急に七百餘艘の船五十万石の米穀を積こそ飯田越中守實教を総大將として船軍に馴る村上彈正左衛門景廣児玉内藏允元助村上越後守吉卿包久式部少輔景勝生口孫三郎景守を始めとして其勢総て三千余人石山の使者井出左一郎を伴侶順風に帆を揚船を艘し摂津國さして押登りぬ頃は天正四年七月二十三日瀑々る音頭の瀬戸を諷に合せて艪拍子を揃へ海士の篝火浦風

遊君と勸て織田方番船の兵を事計る圖

に吹搦ち見へつ隠れつ友呼千鳥鞆水嶋灘も過行ば右手ハ八嶋や壇の浦浪寄てハ反る潮の戰ひ文治平氏の夢の迹も亦忍ばる波枕左手に省ゆるハ播磨灘室の戯き女夕映て何里も姫路沖の石濡るを厭ふ客も多く待ち〳〵聞ハ明石浮須磨の浦邊に來る刻い七月廿五日の夜半ニ乃這沖の方に船どもを繫ぎ飯田越中守實教い去ば鈴木重幸が言送りた仍籌策さへ行ハんとて兵庫柳原ふどの遊女と許多談合児玉内藏介村上彈正左衛門介他雑卒數十人の者と僉船頭水主の容に打扮せ十艘の小船に遊女を分乗翌二十六日の暮方に到り浪速川口に船をさし寄番船の傍を静に遣廻し何方も徒然の御伽進らせん名せ給へ名給ひわと呼立るに頃日の残暑強きに勞れ暮し兼る番兵們ハ何ぞふ

鬱蒸散ぜんものと心に望を居る処ゑれば是い興有船の來りるぞよ呼入て酒宴と催さばやと彼方此方の船どもより声を嚬めて打招く程に引手ハ多く遊女ハ些く獨の君を此處よ彼処と爭ふに船頭等ハ最まりゝる面色して今宵ハ是にて恠へ給へ〻翌夜い船數多に君達をもぐり撰て聚め乗せ御酒宴の興に備へ進らせんと詞伎倆に哆し込れば番兵們大きに浮き出し翌ゑん俺們が好める君ハ容儀ハ勿論音曲に秀出すもとゝる愛敬盛りを伴侶來よゑど注文云て色珍しき番兵ども也已と破滅の級望めば児玉村上們ハ能程に應答〻亦翌の夜を約束して介夜ハ未ざ明ざる間に遊女們を殘も伴侶兵庫の方へ拉帰て女郎を夫々親方へ手渡し須磨に碇泊せし本船へ漕帰りて一々注進も毛

利の軍將飯田越中守ハ重幸の籌策緯よ成りと兵士に指揮して百余艘の小船に究竟の逞兵六百余人を乗しめ大筒小筒の火砲逼与並べ苫を覆ふて遊女の船に修ひ申の刻より須磨浦と押登せ數百艘の兵粮米の船共ハ後に續きて艤らせ巳の刻より折節西風強く吹出し戌の半刻計りに川口ある一の洲にぞ押寄せり織田方の番兵士卒們ハ斯る謀略設るとハ夢にも知ぞ今宵ハ柳原の遊君と七夕妻の逢瀬と得人と酒と整へ者と求めそ僉々介烏の暮る刻よりも今や妻尚へ船と待るふ暗夜あれば物の黒白ハ分らねど多くの船に燈火ふく番船間近く漕來るハ望む君達御來臨と待ふ待る番兵們ハ僉船端に舉り出て掌を打叩き打招き茲〳〵々々と呼立にり百余艘の兵船近々と漕寄一言の

論にも逮ざず鳥銃の箇先を揃へて破乱々々撞と撃懸れば思ひ懸ぬき番船ども矢庭ふ倒れ死る者二百余人番兵恟り周章る間に毛利の軍勢ハ數百の松明一同に船毎に燈〳〵立閧を作つて蒐寄々々番船の中へ飛乗々々當る任せに斬立れば遊女を乗る船〳〵と思ひ詰る番兵們ゆ〳〵更に戰ふ覚悟ふければ何の用ゆも立者ふく鎗よ鳥銃よと閃く而已凡烈如くに斬碎れ逃るに道ふく防ぐに太刀ふく麻亂せる如く斬殺る〳〵四方に搆へ〳〵織田方若より川口に炮声高く聽へられば驚破船手に夜軍こそあれ兵を出して加勢せよとて先墨の江の濱手より八間鍋主馬兵衛沼野伊賀守五百余艘の船に勢兵千八百人武器十分にて取乗つ〳〵北をさして一文字に艤來れば尼ヶ崎より荒木ヶ勢

兵千余人荒浪を切て漕來るを沖手に控へ〻毛利の兵船左右ふ
別れて弓鳥銃を木の葉の暴風ふ散ゞ如く射立擊立支へけれ共兵
粮積込大船より炮烙火器を擊放ちて磯に繫ぎ〻番船の中へ噇々
〻と繫込程に誰らい是を惚るべきやい五体を碎くれ四肢を損じ蠢き苦〻
む介中へ船軍に數年調練るゝ廣島勢の八雄士と呼る〻生口孫
三郎景守浦兵部亟宗勝末長常陸介景盛來嶋三河守通房村上
越後守吉卿白井縫殿亟田所神右亟門尉賀屋東市佐等一様に拔
列頭られ出平地を飛馬にて駈るゞ如く東に趨り西に向ひ敵船に飛乘
て い混切に斬殺し縦横に蒐り八隅に切靡け思ふが儘ふ斬伏しい恰も
林中に塒とする宿鳥を討得るに異ふ〻ず凄冷ドくりる形勢ニ

這時毛利家船手の一將児玉内藏允元助と云い大力強膽の勇士に〻
て殊更水軍に能練れば敵と海中に斬落る綰數を知ず織田方の隊
將ふりける間鍋主馬兵衛尉春儀い大宅丸と号る巨艦に打乘味方
と指揮〻て在るゞ敵の強勢ふるに辟易〻て墨江とさ〻てゞ引ゆく
處に児玉遼に是を着るより俺諌大船と乘取ときい今霄の高名魁さ
るべ〻とて士卒に指揮〻て艢拍子を速ら自ら二ッ玉込る鳥銃携え
狙ひと決め矢頃と着合せ火蓋と切て撞地繫放せば間鍋春儀胴腹を
擊拔れ何らい以て惚るべきやは忽ち海中へ岸波落にき児玉い得〻りと船
と漕着彼大宅丸に飛乘つゝ四角八面に斬立れば敵の從卒們途に惑
ふて或い討れ或ひい海ふ飛入水屑と成者數を知ず難ふく大宅丸を乘

取られ目覺しき働きあり茲に尼ヶ寄荒木村重ヶ軍兵們了事
彼大宅丸にも劣らざる巨艦を設けて之に取乘左右の船梁に鳥銃を
犇と列べ勝に乘る中國勢の軍船の間を事共せず真一文字に押通
り近着敵船打立雜拂ひ海路を開きて勇々しくも尼ヶ崎の方へ引行
ば當り難くぞ省にられば毛利方なる船手の一將村上彈正左エ門景廣
是を省より士卒を激し敵の退船傍觀なりて船手を差つりし功有べ
くぞ彼船乘取て國土産にせよと小船の中に十余人の揖取を立押や
者共急げや船子と浪を切て後追風るに念ふ敵船に漕着しば自
ら熊手を金て船に打ケ飛乘んと做る処を荒木勢の中より中
嶋弥九郎能利ある者走り寄つ、太刀振上熊手の柄を丁と切落と村

上暫も惚らぜこそ已ヶ船中へ仰向に落込南無三寶仕損じぬりとて躬
を伸縮して起上り早足と踏んで飛上んと爲る処を誰ヶ撃出て共
知ねども一固の鐵丸飛來つて胄の草摺をかすりて遠に飛村上之を除
んとあして綱に躓き打倒るると中嶋弥九郎是を省るより飛乱離と
村上の船に踊り入首掻斬んと蒐寄るると村上透さぞ岸波刎起き
唯一刀に弥九郎を斬倒し尚勢ひに乘じて敵の大船に乘入阿修羅王
の暴るる如く喚き叫んで斬捲りしば荒木ヶ勢ハ狼狽騒ぎ遁退んに
も海の上の千尋の底の的もなく寄邊乃岸も程遠ければ敵の小船
へ飛乘て矢庭に討れて死るもあり或ひハ必死の際と觀念して海中
臨んで飛入つ浮つ沈つ游ぐも有然ハ村上児玉ヶ武勇と揮ひ大船二

艘と乗取られば敗軍の番兵堅固と解て恐れて四方へ逃別れり

○毛利家の兵粮石山城に納むる并に安土の新城に信長移轉も住吉天王寺野田福嶋に構へし織田方附城の篝兵們川口に夜軍も聽ずして加勢を入て追散せよやと急思ひ〳〵に駈出るとべ豫て鈴木重幸が計略を傳へ待設けて石山方の若々木津樓の岸と始やとて門徒の衆兵途中に埋伏し織田勢を遮り止め炮擊を以て責脳も〳〵或ひは沼地ふ追込火矢を放ち地の利に応じて戰ふ程ふ織田方の諸勢死傷多く就中下間少進仲之へ越高崎（世俗專ら織多寄と云ふ非なり）の土堤の上に數百挺の鳥銃を構へ佐久間が軍勢の過る処を狙ひと決め筒先揃へて一同に噇と擊放るれば手痍死傷の者百人許り隊伍を乱して顛動

そもと下間勢ふ関を作て取圍を縦横無盡に斬廻れば暗夜に敵は多少も分ぞ佐久間が兵卒過半に討れ怯て尚行向に伏兵あらん一旦引やと衆口呼立脚下四度路朦途勞に追挟られ這々天王寺迄て逃歸りぬ余他野田福嶋の織田勢も途中伏兵の為に討崩され諸方の援兵向ふと雖ども重幸伏兵と配りて支へ〻ば船軍の加勢に合期ぞ弥織田方大敗走して剩へ間鍋主馬兵衛春儀沼野伊賀守吉茂宮崎兼大夫明道中嶌弥九郎能利が輩名ある勇士許多討死し總軍粉の如く討あされ四方八面に逃走して敢て川口へ馳付兵ふく豫ての手配面餅と云りとり是ふ於て石山毛利の兩勢數万人の軍卒を以て安々兵粮船川口へ曳入城中より〳〵牛馬車を出して夜の中に殘らず

石山へ取納め上下勇み歡ぶおと限りなく頭如上人は毛利船大將飯田越中守實教兒玉内藏允元助村上彈正左衛門尉景廣と始め籠頭の武士從兵功臣殘らず城中御殿へ請ゞ給ひ種々と御饗應ありて戰勞盡力の程謝し給ひ愛度くもある次第なり翌る七月二十八日暮方毛利の諸大將は上人へ暇を乞一統帰帆せん綽稟し出にき依之上人御余波を惜まん重ねて飯田兒玉村上の三將と廣書院に請ゞ給ひ正使飯田實教に對ひ曰ふ樣年來信長我宗門を惡み理不尽に軍馬を差向滅却せしめんと為ると以て坊主の本意あるゝねど防戰を固より國郡を爭ふある士望の合戰と謂に非ゝば兵粮の貯へも墓々しゝぞ今限り知れぬ篭城ゆへに城中の門徒向後を危踏然るに過分の粮米送り賜ひ歡び何綽ら是に如へんそ更に酒宴を設あ饗應をし給ひて三將へ一振宛與へ給ふ中も兒玉内藏允元助生質我儘氣隨の人にそ劔を辞して望んで曰く士道と思し名て賜ふ処の莫大の恩賜拜授仕る苦某し別段に冀ふ物の候ふ夫へ豫ての御勸めの如く浮生の人命定數五十年も取譯武士の躬い定命と候ゞ敵と受て討とも討る共陽炎の朝と待ぬ露命と唯永き未來と賴む時へ武士強勇も一世の名聞弥陀の名號に携る外や某戰場に敵を討綽夥し願くい多罪悉滅して報土の極樂へも先鋒の往生黄蓮の臺に一番乘の成佛と口唱の本尊を與へ給ひゐゞ子孫に傳へて安心の什寶と為べくと亦悍りもあく望ひ水ハ

開山聖人真
筆の名号の
昊端鳴門の
大灘ゑ児玉
内藏
允一命
と免
る圖

び上人異議なく承引まゝく開山聖人御真筆と染給ふ文字の名號
小幅の掛物望に任して與へ給へば児玉三拝頂拜して歓びなり徳て三將も
粮納の勝軍を祝し聽て御暇を禀し請石山を出総勢川口より發船し
て藝州廣嶋さして歸帆をゝり其中に児玉内藏允元助い主君の所用
を兼ねゝ播州高砂の浦に船を止め談地に三日滞留ゐして主
要調へ既に歸國ゐ逮だんとせしが折節小鳥風荒く小雨降て出帆ゐ
ゝりしゝが尚日和を俟て碇泊あせか

毛利の家臣児玉内藏允元助い石山城中に兵粮を約めて後主用に依て播州高砂の浦に碇泊
の内しあき思念を起して往古より名木と尊ゐる高砂の松を伐倒しゝが歸帆の節前の
沖に於て卒に難風吹起りて阿波の鳴戸に吹流され已よ兼組金海底に沈まんとせ是正しく神木
を伐し祟りゝ此時児玉心ゐ戦悔し天地を拝して念じて曰く我神水を伐る咎を受て今此大海
に死ぬとき神罰今更許さるゝ併しゝ君命を受石山へ兵粮を納兼ては高砂表の所用
を務む其返言も主君へ告げ海底の藻屑とゐん縡覚悟の上なれども最残念之天地佛神之を憐れゝ

一面本國へ歸し給へば君命も全て忠義も立ち其後肚切て相果べしと祈念を凝して願ひ
更に風波の暴止ゐ弥来つて吹来れば如何ゐも防ぐ術ゐ時に児玉い石山城に於て上人ゐ
願ひつ授り得ゐ開山聖人の御真筆ゐ六字の名号を賜ゐ所持しゐと心着れば
を取出して船端に捧げ一心に念佛を高声ゐ唱へ名号を海中ゐ投入れゐ然るに奇異や吹荒び
ゐ大風雨立地に鎮りつゝ海面畳を敷ゐ如くゐ終ゐ恙ゐく藝州廣嶋へ着岸せり頃て船を上
らんと仕ゐ処に艫の方に光明赫々として彼六字の名号偖め上に掛り給ふ金一同ゐ奇異の思
ひとゐし感涙肝に銘じて有ゐく濡ゐ名号筥に収廣島の城に登城ゐて伍一什を言上ゐ及
び児玉い神罰逃れざを暫く宥免蒙りゐとて神に誓ひ詞を違べぞ宅に歸りて自殺せしと
此名號を世に掉懸の名号と
稱して今に小家流に持傳ふと之

偖亦織田右大將信長卿の新城江州蒲生郡安土山の経營今年中秋ゐ到
て漸全功し濃州岐阜より御移徙し給ひ續いて近習外様馬廻り以下
の屋敷々々地面割有れば廣き山上山下も更に閑ぎて空地
いゐく今年四月朔日より尚天主の修造有べしとて其儀を沙汰し始
めゝれ七月に至て成就ゐしゝ土臺の高十七間餘此上に七重の樓

閣金銀珠玉を鏤め結構莊嚴言語に絶ぜ實に前代未聞の經營也
杜下には諸侯大夫の館舍列り大度軒端を並べ碁盤目の如く巍々と
て圍繞せる形勢見ぬ異邦の秦の阿房宮にも了事劣らぎる壯觀と覚
ゆ其北より西の方の景況は湖面渺茫として船の往來恰も衝がごめの浮も
がごとく鳴る澳の波間には多景嶋竹生嶋湖上に浮ミ乾遥に保阪朽木
及び名ふ一貫深雪の眺め比良ゞ嶽途中嶺や比叡山談合谷も如意ゞ嶽
滋賀の濱松前に着て瀬田の小々浪通ひ路も夕映臨む女夫橋南へ上甲賀
山高峯連る信樂多良三上各々駂は眼下に着度一東に遊きは觀音
寺山水昌嶽や八風距は伊勢地も靡く君ゞ畑良着れば摺針に猶弥高の
雲の白縫綾ふき不伏の戎敵も織田に隨ふ伊吹下風の草木も伸伏武將

の城郭金に飽て築造あれば尓結構美麗云も愚なり瞻向逮べぎと云地も
ふ一然ば賴朝尊氏草創の例を引諸大矣我もくと馳せ上りて登城を願ひ
御賀儀と奏して獻上物捧ぐ視る人聽人驚感せぎと云緯ふ一時に天正
四年丙子七月廿九日摂州天王寺佐久間の方より早騎の者安土城に來
つて石山本願寺の城中に於は既に兵粮乏しく相着へ中國の毛利家まか
ふひ仕り兵粮凡五十万石余と數百艘の船に積入助勢る処豫て仰
せ付らる難波川口味方の番船數艘あれば容易通船成難きを毛利は
船奉行奇計ぢ回一七月廿六日味方の番兵と欺き不意を計つて乘入
るゞ之に竟に合戰ふ逮びゝ共緯倉卒に起りゝゆに番兵數多討死
ゝ中國勢難ふく石山ふ兵粮を納ゞ亦諸方の附城より一川口へ援

兵を出さと雖も道々ふ石山の伏勢有て是に遮きられて援る縡と得ぞ味方散々ふ討碎れて総敗軍に逮ぶ由注進を信長聞給ひ一回ハ怒一回ハ駭き存外ゑる石山の行狀ゑ坊主們ゑ〻討平らけどゝて爭ゑ大業と成就せん予不日に出馬して惡僧們鑿ちせんと議せゑる處へ六八月三日に北國より早騎來つて言上ゑる樣ハ加州大聖寺の城主ゑる次右近去年越前一揆退治の後在城して加州と漸々に切鎮めよとの御錠と蒙り追々加州へ手配に逮ぶ処當節に至りて大聖寺の居城へ加州の本願寺門徒們先主富樫之助の殘黨と談合數萬の鄕民一揆を企居振搞敷地山等に砦を構へ衆兵押寄來り候ふより右近如何も軍慮を揮て毎度合戰勝利と得候へ共一揆ハ倍々勢加りて素より城中篭兵ハ外に翼を請る後詰はゐく然れども右近ハ些一も屈せず手勢而已にて敷地山へ討て出一揆們多分討取て候ふ即ち介首帳注進仕り候ひ訖ぬ自夫後加州能美郡の門徒一揆佛敵退治と書白旗押立小松御幸塚に屯集して大聖寺を襲ハんとゑる風聞ふ候ふより右近馳着とれ〻合戰に逮び一揆們多勢討取て候ふ去ふ〻味方ハ限りゑる勢ふて一揆の方ハ勢增殖ゑるに右近生涯の力と揮ひて忠戰盡し持ゝて候へ共最早手勢も疲れて候ふ早々加勢と下し給り急に征伐ふ給ふとぞんば忌々敷大事に逮び候ハんと追々續けての注進ゝり依之信長弥本願寺を惡ミ給ひ此賊徒急に征伐せどんば枕を高くして眠り難しとて先佐久間玄番允盛政と大將とし數萬の軍勢を相

添つ加賀の一揆を討しをらる〻加之越前の北の庄城主柴田修理進勝家い則ち佐久間盛政の伯父なれば俱に盛政と力を合せて平治きべき旨命じ給へば勝家畏り盛政と一手にやり加賀國小松え發向を復中國に足利義昭卿去める天正元年横逆に依て自滅の敗を取せられて宇治槙の嶋を退去して河州若江の三好を頼み織田に敵對沈落あり〻と石山顕如上人之と勅り給ひ且毛利家の援助に依て備後國鞆の津に潛行在て後毛利三家の守護を以て鞆の津に一城を築き鞆の公方と尊称せん安堵の席坐しるるより暗に毛利三家と始めとし中國幾内の武士を談合ひ石山本願寺と諜し合し再び京都に責登りて公方家再興の計議を催さんとて毛利三家本願寺を首め幸の事ふ令承して信長誅伐の内評區々有て尚諸國戰亂の巷と成めぐく萬民安き心ふく世を送りあ

繪本石山軍記第二編卷之八畢